

10月14日
報告

「和解を導いた力 Part 3 —西松建設裁判原告・宋継堯さんの闘いをふりかえる—」 に参加して

金子 哲夫

14日午後2時から広島弁護士会館で開催された「和解を導いた力 Part 3 —西松建設裁判原告・宋継堯さんの闘いをふりかえる—」に参加しての報告です。

タイトルの「和解を導いた力 Part 3」とあるように、今年は、過去2年間にふりかえった呂学文さん、邵義誠さんとともに受難者として西松建設裁判の原告となった3人の一人、宋継堯さんの闘いをふりかえる企画でした。

西松安野友好基金運営委員会の運営委員だった杉原達さんの司会で、集いはスタートしました。



杉原さんは、毎回大阪から参加し、司会を務めてこられ、宋さんのことを「自分は例え死んでも魂となって闘いたいと2007年家族の反対を押し切って来日、それは『人間と民族の尊厳を守る』ための闘いでした」と紹介し、集いはスタートしました。

最初に、「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」（以下「継承する会」）の川原洋子さんが「宋継堯さんの軌跡」を紹介。川原さんは「宋さんの生い立ちから日本に強制連行され



た経緯、安野発電所現場でのトロッコ事故から失明に至る経緯、その後病気やケガで働けなくなった12人とともに下関から帰国、下関で船を待つ間に右目が腫れ上がり、痛みのあまり2回気を失い、痛みに耐えきれず、自分の両手で右目の眼球を押し潰したこと」、さらに帰国後の苦難の生活が続いたことを紹介し、1994年1月に宋さんが安野の生存者であると確認されたこと、1995年の50年ぶりの来日、その後の西松建設裁判において宋さんの証言が大きな役割を果たしたことなどが紹介されました。

川原さんの話の中で特に印象に残ってことが二つあります。

一つは、1994年5月の聞き取り調査での体験。「ようやく自分の話を聞いてくれる人が出てきた。本当にうれしかった。中国では、それまで自分の話を聞いてくれる人はいなかったの」という宋さんの声です。

二つは、「宋さんの観察力、記憶力がすごかったことに驚かされた。『中山』という当時の引率者の名前、現場の総監督の帽子に『吉田』と書いてあったことをはっきりと覚えておられた。トロッコ事故が原因で失明した話をビデオに撮り、西松建

設に持って行って見せた。そうすると、それまで拒否していた共同調査に西松がすんなりと応じた。」という話です。川原さんは、宋さんの観察力、記憶力がその後の裁判や西松建設との交渉で大きな力になったと紹介しました。

川原さんの「宋継堯さんの軌跡」の紹介のあと、当時のニュース映像（4本をまとめたもの）が上映され、宋継堯さんの在りし日の姿を偲びました。

川原さんの話やニュース映像を見ながら、不自由な目をおして来日された宋さん、その宋さんの来日のためのビザ請求の手続き（当時は、中国から受け入れるときには、身元保証人などの申請が必要だった）のお手伝いをしたことなどを思い出しました。

それから、第二部の「宋継堯さんを語る」がスタートしました。

残念ながら、今年も中国からは遺族や関係者を迎えることができず、リモートでの対話となりました。

宋さんの遺族の参加を得ることができませんでしたので、今年は、西松建設裁判や現地での打合せなどで通訳として宋さんに寄り添いながら活動してこられた中国在住の陳輝さんの話を聞きました。

いつものように川原さんの質問に答えながらの話です。その一部を紹介します。

「1999年9月に中国を訪れた二人の日本人（川原さんと杉原さん）の通訳をすることから関わるようになって以来、18回ぐらい調査や裁判、申入れに同行し、活動を共有してきました。当時マスコミもほとんど報道することはなかったので、活動に参加するまでは、強制連行の話は、知りませんでした」。そんな陳さんでしたが、あるとき同行する車の中で「中国人被爆者・癒えない痛苦（トーカー）」（強制連行された中国人被爆者との交流をすすめる会1995年発行）を読んで、「加計を

訪れてもなかなか現地の人が証言してくれなかったことを知り、その中で『太田川が中国人の苦しみを呑み込んで静かに流れている』ことなどの言葉に動かされて、本を翻訳することになった」とその経緯を話してくれました。

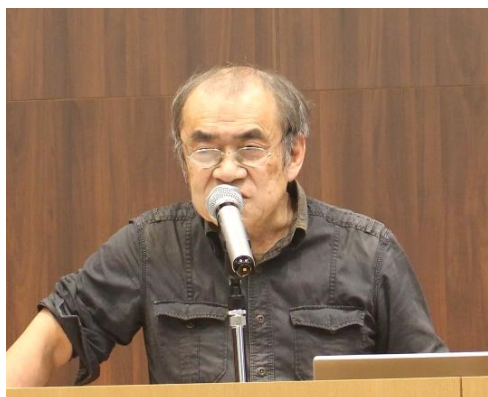


陳さんの努力によって中国語に訳された本が出版されたことも、中国国内で西松建設裁判への理解を深める大きな役割になったように思います。

宋さんについての陳さんの話です。「はじめはどういう原因で失明したのか知らなかった。その後潘洪元さんからその経緯を聞いた。食料が充分でなく、力が出なくて、ブレーキをかけるのが遅くなって脱線したと、宋さんから聞いている。失明して帰国した宋さんにとって当時の中国で生活するのが、どれだけ大変だったか。自分は農村に住んでいなかったのに、きちんと理解していないが、失明した人が農村で生活するのは本当に大変だったはず。本人のみならず、子どもたちも差別を受けていた。そのため長男は武術を習っていた」ことなど、陳さんならでの話を聞くことができました。「宋さんは、三つの要求をしていました。謝罪、賠償、記念碑の建立。宋さんに代って言うのは難しいのですが、碑の建立を大いに喜んでいると思います。歴史は忘れられるが、加害企業が記念碑をつくり残すことは意義があることです。」とし、最後に「過去の教訓をくんで、日中が永遠に平和・

友好であることを願っています」と結んで、陳さんとのリモートでの対話は終わりました。陳さんの証言を聞きながら、陳さんたちの協力が、西松建設裁判の大きな力になったことを改めて実感しました。

次は、奈良から参加された老田裕美さんの話です。



老田さんは、16の中国人強制連行裁判が行われたうち6件の裁判に関わってこられました。西松建設裁判の第一審で通訳をしたことを紹介しながら、宋さんについて「1000人以上の被害者と出会ったが、宋さんは被害の実態が非常に明らかでした。奥底に怒りの感情を抑え、静かな声で切々と訴えることのできる人でした。冷静的確に陳述ができ、その姿は数人しかいないピカイチと言えるものでした。そして明るい人だったことが印象に残っています。」とその人柄を紹介しました。

私が印象に残っているのは、宋さんの帰国後の生き様です。「宋さんは、小学校4年、高級学校2年を卒業しています。当時6年間の教育を受けた人は、少なかったのです。もし失明がなければ、それなりの仕事に就けたはずです。失明で食べていく方法がない。しかも、帰国して一年ぐらい経ってようやく体調が回復した。『説唱』（金子注：「説（かたり）と「唱（うた）」を兼ねた芸能で街頭で行った）で生計を立てていた。」

そうした本当に厳しい生活の中で5人の子ども

を育てることがどんなに大変なことだったろうかと、私には想像もつきませんが、日本での強制労働が、それ以上の苦悩を押しつけてしまった宋さんの帰国後の生活を始めて実感することになりました。

老田さんの話は、広島安野の取り組みの評価や各地の裁判への影響、16の裁判の特徴と西松建設裁判が与えた影響なども詳しく紹介されましたが、私には、宋継堯さんの帰国後の生き様が、最も強い印象として残っています。

その夜の交流会で老田さんからさらに厳しい話を聞かされました。「中国で起こった文化大革命で、日本からの帰国者が厳しい批判の対象となったと言われ、確かにその事実はあったが、宋さんのように最下層とも言われる生活者は、その対象にもあげられなかったのですよ」

1995年5月広島を訪れた宋継堯さんが読んだ詩が老田さんの翻訳で紹介されています。それをぜひ紹介したいと思います。

日中友好思いあり、五十年ぶり広島に
思い起こせば香草にて、失明させらる苦しみを
悲しみ痛苦、涙溢る

両のまなこを失いて、地獄の如きありさまで
一生災難受け続く、誰を怨めというべきか
みな西松のなせるわざ

今生恨みは晴らせぬか、泣き寝入りかと口惜しくも
海に沈むと語れしが、思いがけずによくに
恨み晴らすは今日にあり

語り聴かせん若者よ、我身に受けしこの苦難
なんとしてでも、証すぞと、準備おさおさ怠らず
闘いや今、闘志高し

西松あれこれ言い逃れ、強制連行の責任を
転嫁しようとあがいても、平和を愛する人々は
これを決して許しやせぬ

歴史の苦難再びは、繰り返させぬ二度とまた
平和を守るそのために、それを決して許さぬは
若者たちのつとめなり

心血そそぎ、人のため、世のため未来つくるため
ともに手と手を携えて、平和、自由、幸福を
この手にしっかり勝ちとらん

陳輝さん、老田裕美さんの話を聞いた後、この
詩を読むと宋継堯さんの強い意思と決意を深く読
み取ることができます。



最後は、足立修一弁護士の「宋継堯さんの和解
を導いた活動を振り返って」と題しての話でした。
最後に「戦争が人々にどんな苦しみを与えたのか。
戦争は人々をむちゃくちゃにする。真実を知ること
が大切だ」と訴えて第二部が終了しました。

閉会あいさつは、継承する会世話人土屋信三さん。「和解を導いた力として宋さんの話を聞きました。日本が今どこに行こうとしているのか、今過



去の歴史を学ぶことが大切さを感じています。日
中友好が子々孫々まで続くようにわれわれは努力
しなければなりません」と呼びかけて集いは終了
しました。

民間交流が敷いたレールに乗って、日中国交回
復が実現し、日中平和友好条約が結ばれて今年
はちょうど45周年です。その第1条で次のように
約束しています。「両締約国は、主権及び領土保全
の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干
渉、平等及び互惠並びに平和共存の諸原則の基礎
の上に、両国間の恒久的な平和友好関係を発展さ
せるものとする。」

土屋さんのあいさつを、この一節を思い起こし
ながら聞きました。参加者は、44人でした。

来年は、中国から被害者遺族を招いて、この集
いが開催されることを期待し、報告を終わります。

